

## 堂中の修羅

白霧草

真夏の風が、緩やかに堂を抜けていく。

薄暗く塗り込められた堂の中は、どこか浮世離れしているようだが、外から差し込む陽光のけたたましさの前には、それも霞む。けたたましいと言えば、夏盛りを思わせる蝉の声。

「五月蠅い、五月蠅い」

着流し姿の漢は、ほど広い堂に忍び込むと、外に向けて開かれていた左右の戸を内に引いた。戸が閉まるにつれ光が細くなり、ついには薄暗さだけが残された。風も、消える。けれども、蝉の声は相変わらずけたたましいままだった。失望するように、漢の眉根が寄る。だが、耳を凝らしてみれば、ほんのわずか、音も遮られていくらしい。

「何もせぬより、まし……か」

とてもそうとは思えなかったが、再び開け放つ気にもなれない。そのまま堂の中央に歩み、どかと腰を落とすと、片膝立ちで座り込んだ。

眼前には、仁王の像がある。

凄まじい形相で、こちらを見下している。見上げ睨

めても、変わらない。

仁王の眼を見つめてみると、何やら苛まされているような気がしてくる。それに、悪鬼を砕くための抜き身の剣は、陽の差さぬここでは艶かしく光っているようだ。

ひよつとすると仁王の朱塗りの剣は、今振り下ろされるためにこそあつたのではないか。そんな事をふと思う。漢は下らぬ考えを拭おうと、鼻で笑ってみた。

けれど、剣の艶かしさは拭えない。仕方なく、座を正し、腰に結わえられたままであつた刀を鞘ごと外した。それからしばらく、鞘越しに刀を掴んでいたが、やがて何も起こらないと知ると、研がれたばかりの刃を剥いた。

漢は、一点の曇りもない刃をまなざしでひとなめした。それから、柄に目を向ける。こちらは刃とは好対照に、へたり使い込まれた跡が容易に見取れる。再び刃に向き直ると、漢の口元に微かに笑みが浮かんだ。

「紅い、のう」

漢は微笑つたままで呶くと、再び仁王に目を移した。

「ぬしの得物も、同じかのう」

問うても、応えは返ってこない。

「それとも、鬼を砕くためのものとは、違つか？」  
再び問うて、今度は哄笑う。野太い声が、堂中を満た

す。ひとしきり笑うと、もう一度刀に目を落とし、今度は虚空に問うた。

「何人、斬った？」

答へは、返さない。代わりに大きく息を吐き、立ち上がった。仁王立ちで仁王を見返すと、それまで意味もなく漂っていた音たちが、ひどく明瞭になった。

蝉の声の連なりでしかなかったその中に、風のそよぎや草のざわめきが混じり込む。心地よい音の漂い自身を任せていると、そのうち、それらの全てが堂の外からの客だと悟る。ことさらに意識すると、今度は堂

の内側の静寂が聴こえ始める。

内の静寂に耳を傾けると――よどみに触れた。肌を感じるよどみは、堂の空気を完璧にしない、最後の壁のようだった。

よどんでいるのが空気だということは、すぐにわかった。戸を閉めたからだろう。それまではわずかな風がよどみを流していたのだ。それが今は、晴れる気配もない。戸を開ければだいぶましになるだろうとは、容易に想像がついた。

けれどだ、よどみは己の内から来ているのでは、と思えて仕方がない。

ひよつとするとよどみが払えはせぬかと、漢は刀を構えた。

曇りのない構えから、曇りのない刃を抜けば、その曇りのなさでよどみを拭えぬかと思つてだ。だが、よどみは一向に拭われる気配もない。それでもしばらく、刀を振るっていたが、やがて無理もないと微笑して嘲り、あきらめて刀を鞘に収めた。

それから、不意に思い立ち、刀を鞘ごと放り出した。それを横たえ、腕を枕にすると、挑発するように言った。「夕刻までは、寝ておるつもりじゃ。斬れるものなら、斬つてみい」

しばらくすると、寝息が立ち始めた。

蝉は、相変わらず鳴いている。がなりたてるような音の洪水の中に、ときどき草のそよぎが姿を見せても、漢は見向きもしない。ただ、ときたま寝苦しそうに声を立て、寝返りを打つ。

仁王は宙を、見下している。漢には、見向きもしない。

それが、夕刻まで続いた。

やがて、陽の傾きもいよいよ大きく、もうさほどもせずに日が暮れるという頃になって、漢はついにその身を起こした。

「ふむ……」

刀を手にし、立ち上がると、よどみがだいぶ薄らいでいるのがわかった。

「斬られなんだは——墮ちよと言うか」

そのままよどみを気にせず突き進み、堂の戸を開けた。

するとだ。堂を出てすぐの所、ちょうどそのためにあつらえてあつたような置石に、相手が座っていた。相手は、細面をした若者であった。腕も、漢に比べ、やや細いか。けれど、座る姿に隙がない。よほどの手練と見えた。

漢が品定めをするように若者の横顔をうかがっていると、若者はそのままの向きで問うてきた。

「何人、斬った？」

問われると、しばし迷ったが、今度は答えた。

「四十と、九人」

決断するまでの惑いが嘘のように、答える声には迷いも躊躇いもない。

その答に、若者は刀を抜き放った。立ち上がり、振り向いて、切っ先を漢に向け、鞘を投げ捨てた。

「……死合、願おう」

若者が言ったのはそれきりだ。理由は言わない。

ただ、瞳が尋常でない。どう尋常でないのかと覗き込んでみると、昏い瞳だと思った。だが、眩しいとも思った。果てしなく昏いが、夕の陽より激しく燃えている。

その昏さに、仇なのだろうと、直勘した。戯れとは言わぬが、実のところ、およそろくでもない理由で斬ってきた者いずれかの、縁者だろう。

試しに、訊ねてみた。

「何故、死合う？」

若者は、しばしの間のあと、「承けるか、承けぬか」とだけ、返してきた。

若者の構えには、座り姿と同様、隙が見えなかった。かなりの修練を積んだのだろう。おそらくは、この死合のために。

漢は、肩越しに首だけを向け、堂の中に目を転じた。

仁王は、相変わらずの姿で立っている。その眼も変わらないの様子で、丁度漢の眼を射抜いている。何もかもが、寝る前にねぶるように見た、そのままの姿だ。だが、不思議なことに、何も思わなかった。悪鬼を苛む眼を見ても、朱塗りの剣に目をやっても。仁王のまなざしは、ただ、責めも認めもせずに、漢を射抜いているだけだった。

漢は、破顔すると若者に背を向け——体ごとで仁王に相対した。それから、破顔を、いつそうにする。

思った通りだ。何も、想わぬ。

漢は、そうかとおつぷやいた。口元からこぼれた犬歯が、牙のようにぬめっていた。

漢は一つ武者震いをする、背中越しに告げた。

「来い。仁王の前で、死合いたい」

蟬の声しか返つてこない。戸惑っているのだろう。構わず歩みを進めると、やがて足音がついてきた。堂に入り、右に寄ると、若者は左に行つた。

「ならば、死合うか」

漢はいささか大仰に刀を抜き、鞘を投げ捨ててみせた。それは、ともすると仁王に示すための振る舞いだつたのかもしれない。

若者は、既に構えていた。青眼の、曇りのない見事な構え。いささか我流が混じっているようで、どこの構えだかはよくわからぬ。だが、飾りだけの剣でない。殺めたことがあるかどうかはわからぬが、人に向けて振るわれたことのある、本物の剣だ。

久方ぶりに、楽しむか。

そう哄うと、漢も構えた。若者のそれと同じく、青眼の構え。けれども、若者のそれとは違う、血に飢えた修羅の構え。

もはや、修羅に、迷いはない。